Osaka University Knowledge Archive

Title	高知県四万十市西土佐におけるスタイル切換え ：フォリナー・トークの観点から
Author(s)	カーター, バーバラ; 白坂, 千里; 韓, 娥凜
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2013, 11, p. 42-56
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/24759
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

『阪大社会言語学研究ノート』第 11 号（2013 年 3 月）42-56

高知県四万十市西土佐におけるスタイル切換え

―フォリナー・トークの観点から―

カーター　バーバラ・白坂　千里・韓　娥凜

【キーワード】西土佐大宮方言、フォリナー・トーク、スタイル切換え

【要旨】

本稿は西土佐地域を対象に、他地域から来た人物に対してどのようにスタイル切換えが行われるかについて、フォリナー・トークの観点から明らかにした。具体的には、他地域から来た人物が外国人であるか日本人であるか、外見から外国人と明らかに判断できるか否か、ということがスタイル切り換えに影響を与えるかについて考察した。その結果、これらが言語行動の切換え・言語形式の切換えどちらにもあまり影響を与えることはなかった。対象とした地域の都市化の程度や、外国人の日本語能力の高さなどが要因として考えられる。

1.　はじめに [1)]

本稿では、2011 年 7 月に大阪大学大学院文学研究科の社会言語学ゼミが行ったフィールドワーク活動の一環として、高知県四万十市西土佐におけるフォリナー・トーク（以下 FT）の使用について分析した結果を報告する。先行研究の指摘を踏まえ、外国人との接触頻度が少ない、西土佐地域におけるスタイル切換えについて、FT の観点から考察を行う。まず、2 節では先行研究と問題のありかについて述べる。次に、3 節では調査概要、4 節では実際の分析結果とその考察について記述し、5 節でまとめを行う。

2.　先行研究

対外国人言語行動を分析した研究としては、スクータリデス（1981）、ロング（1992）などが挙げられる。これらの先行研究では外国人との接触場面における対外国人言語行動に注目し、分析を行った。本節ではまずこれらの FT に関する先行研究についてみたあと、高知県幡多方言話者のスタイル切換えに関する先行研究についてみていく。

2.1. FT に関する先行研究

スクータリデス（1981）は、どの言語でも以下のような FT の特徴がみられると述べている。

- ゆっくりしたことばの拍子、長いポーズ
- 補助的な要素である助詞、助動詞、動詞語尾の強調
- 文法的には正しいが、非常に短い文の使用

1）　本調査の実施、報告書の作成はすべてカーター・白坂・韓の 3 人共同で行なった。

- 「キー」となる語、節の繰り返し
- 相手の母国語を用いること

ロング（1992）では、関西地域の道端で出会った見知らない人に道を尋ねる場面での談話を分析した。その際に現れた FT の大きな特徴としては、スクータリデス（1981）でも指摘された他言語単語を用いて対外国人言語行動を行うこと以外に、1 つの句を 1 つの単語に置き換えることなどがあげられている。例えば以下のように、（A）では、「歩く」を意味する他言語単語「walk」を用いている。そして（B）では、「こっから歩いたらわりとあります」という 1 つの句を「遠い」という 1 つの単語に置き換えている。

（A）歩いてね、ウォーク、ウォークでね。（ロング 1992:60）

（B）こっから歩いたらわりとあります、遠いねん。（ibid.:61）

一般にはこのように、話者が聞き手のことを意識し、自らのことばを調整すると考えられる。しかしロング（1992）では、関西方言ではそうなるとは限らないとも述べられている。

またオストハイダ（1999）では、外国人 115 人に対して行った意識調査から、外国人の外見と日本人の対外国人言語行動との関係について、以下のことが述べられている。日本語能力の高くない外国人が日本人に話しかけた場合において、その外国人が外見的に外国人と判断できない／しにくい時、日本語の使用を避ける日本人が約 26%のみである。その一方で、その外国人が外見的に明らかに外国人と判断できる場合、日本語の使用を避ける日本人は約 44%である。日本語の会話能力が高い外国人が日本人に話しかけた場合も同様の傾向がみられた。

2.2. 高知県幡多方言でのスタイル切換え

ロング（1992）のデータには方言形が現れているが、高木（2002）では高知県幡多方言話者のスタイル切換えを調べるために、高年層話者の対同年代（以下「対同」）、対孫、及び初対面の対若年層調査員（以下「対調」）の談話の 3 つを比較し、方言形と標準語形の切換え、丁寧体と非丁寧体の切換えについて述べている。特に本調査と関係があるのは高木（2002）の対調の談話で現れたスタイル切換えであるが、その結果は以下の通りである。

- 対調の談話で、方言形と標準語形の切換えがみられた。例えば、原因・理由接続助詞[2]の場合に、対同の談話では主に方言形のケンを用いていたが（ケン 46 例、カラ 1 例）、対調の談話ではカラ（カラ 19 例、ケン 9 例）の方を主に用いていた。また、準体助詞は対老・対調両方で主に方言形のガを用いたが（対同 46 例、対調 5 例）、対調の談話のみで標準語形のノ（1 例）が現れた。
- 対調に対しての切換えはあったが、ほとんどが連続的な切換えであった。連続的な切換えとは、方言形を全て標準語形に切り換えるといったカテゴリカルな切換えとは違い、標準語形と方言形の両方を使用するが、その割合が方言形優勢から標準語形優勢になる、といったような切換えを指している。高木（2002）では、上述した原因・理由接続助詞と準体助詞は連続的に切換えられていた。

2） 逆接の接続助詞に関して高木（2002:62）は「切換えの指標となっているかどうかは不明である」と述べている。

- 丁寧さに関して、対調に対してデスとコピュラを付加しない体言止めをほぼ同じ頻度で用いていた一方、対調に対してより多くマスを用いていた。

以上の結果から、対話者が外国人であるかどうかに関わらず、対話者が初対面の場合であれば丁寧な形式をより多く用いることが予想される。一方、丁寧形式と共起できる方言形ケン・ガのような形式はカテゴリカルに切換えられていなかったため、対話者が外国人である場合にどのように切換えるかが興味深く思われる。

2.3. 問題のありか

以上、先行研究について概観したが、本稿では以下の 3 つに注目し、分析を行う。

- 外国人との接触頻度が少ない西土佐地域において、どのようにスタイル切換えが行われているか、その中で FT らしいものがあるかについて調べる。
- インフォーマントと同じ国籍の日本人の調査者との談話も調査し、対外国人談話と照らし合わせることで、FT としての特徴なのか、単に他所から来た人に対する切換え行動なのかについても明らかにする。
- 外国人であることが外見から分かる外国人調査者と、そうではないアジア系の外国人調査者との談話において、どのような切換えがみられるかについて検討する。

3. 調査概要

今回の調査ではインフォーマントの対調査者談話を収録した。1 人のインフォーマントに対し調査者 A、B、C（以下それぞれ A・B・C）の 3 人が約 20 分ずつ交代した談話を分析の資料とする。談話の際の話題は特に限定していない。A は外見が日本人にみえる韓国人、B は外見から外国人であることが分かるカナダ人、C は日本人である。また、3 人とも 20 代であり、A も B も日本語能力が母語話者に近い[3)]。したがって、外見と国籍以外、インフォーマントに与えられた調査者の属性に関する情報に、A・B・C 間では差がない。

なお、インフォーマントによって調査者の順番を変更したが、これはあるインフォーマントの談話で切換えがみられた場合、別の順番で行なったインフォーマントの結果と照らし合わせることで、それが調査者の順番によるものか否かを検証するためである。

3.1. インフォーマント情報

FT の調査には 7 人のインフォーマントが参加し、2 対 1 の談話は 2 つ、1 対 1 の談話は 3 つであった。2 対 1 の談話は録音環境が悪く、文字化に支障があり分析に適さないと判断したため、今回は 1 対 1 談話の 3 つのみを分析の対象とした。1 対 1 の談話に参加したインフォーマント情報を次の表 1 に示す。

3）2 人とも 5 年以上日本語を勉強し、日本語能力試験 1 級をもつ。

表 1 インフォーマント情報

話者 ID	年齢	生年	性別	居住歴
ABF	84	1926	女	大宮（0-）
ACF	83	1928	女	大宮（0-19）、香川県（19-20）、大宮（20-）
AIM	71	1941	男	大宮（0-）

また、インフォーマントに外国人との接触経験、外国での経験に関して質問したが、本調査が外国人との初めての接触であったといえるぐらい接触経験は少なかった。

3.2.　談話情報

今回の分析対象となる談話の情報を表 2 に示す。

表 2 調査実施順・録音時間・話題

調査日時	話者	1 人目	2 人目	3 人目
2011/7/16	ABF	**A**（24:47） ・大宮について ・昔の生活 ・孫・曾孫の話	**B**（20:13） ・大宮について ・昔と今の生活 ・大宮の観光地・祭り	**C**（18:42） ・今の生活 ・娘、嫁の話
2011/7/17	ACF	**C**（17:54） ・日常生活 ・ゲートボール ・介護支援事業所の話	**A**（17:04） ・娘の話 ・昔の生活 ・ゲートボール	**B**（16:51） ・家族の話 ・バイク ・高知―大阪の交通事情
2011/7/16	AIM	**C**（24:44） ・将棋大会 ・大宮で遊ぶ所	**A**（21:19） ・大宮で遊ぶ所 ・戦時中の話 ・将棋の話 ・韓国の話	**B**（26:52） ・田舎の生活 ・孫について ・カナダと日本

※（）内は録音時間

上の表から分かるように、調査開始前に話題の限定はしていなかったものの各会話の長さ及び話題はあまり異なっておらず、対 A・B・C 談話を比べるのに支障はない。

3.3.　分析方法

次に、調査から得られた談話資料の分析方法について示す。分析項目には、スクータリデス（1981）やロング（1992）を参考にした FT に関するもの（3.3.1 節・3.3.3 節）と、高木（2002）を参考にした、方言形と標準語形の切換えや丁寧体と非丁寧体の切換えに関するもの（3.3.2 節）を立てた。

3.3.1. 典型的 FT

まず 2.1 節であげた、先行研究であげられている FT の特徴と一致するものがないかを談話の中からみる。なお分析の際には、談話中に調査者自身が書いたインフォーマントの様子についての調査メモも参考にした。

3.3.2. 形式の切換え

方言形と標準語形の切換えや丁寧体と非丁寧体の切換えをみるために、高木（2002）にならって今回は「逆接の接続助詞」「原因・理由の接続助詞」「準体助詞」「コピュラ」、丁寧体「マス」について分析する。それぞれ分析する具体的な形式は以下の通りである。

- 逆接の接続助詞 … 「ケンド」「ケド」「ガ」
- 原因・理由の接続助詞 … 「ケン」「カラ」「ノデ」
- 準体助詞 … 「ガ」「ノ」「ン」
- コピュラ … 「デス」「φ（φ＋文末詞)」「ダ」「ヤ」「ジャ」
- 動詞の丁寧体／非丁寧体 … 「マス」「φ」

なおコピュラは平叙文に現れたもののみを対象とし、疑問文に現れたものについては除外する。疑問文に現れたものについても分析は行なったが、対 A・B・C 間で目立った差はみられなかった。

3.3.3. 発話量

先行研究であげられている特徴以外に発話回避やあいづちの多用など、対 A・B・C 間での違いがないかをみるために、インフォーマントの発話全体を「実質的発話」「あいづち」「聞き直し」「フィラー」に分類する。

「実質的発話」を数値化するにあたって述語を数えた。述語とは、終止形、テ形、コピュラなど、談話の中の文あるいは複文の一部である（1）の中の下線部などを指す[4]。

（1）AIM： んー、別においしいものは ない
C： @@
AIM： 田舎やけん

「あいづち」は（2）の下線部のように、「うん」「はい」「そうですか」などを指し、直前の調査者の発話（の一部）の反復も含む。

（2）B： なんか緑見るの久しぶりです、も大阪の中だから
ABF： あ
B： 公園もあるのはあるんやけど、草じゃなくて
ABF： ん
B： もー土だけで
ABF： ん
B： 木はあるんですけどそんなにないし

4） 文字化の表記については、末尾に示した「談話例文の文字表記」を参考されたい。

「聞き直し」は調査者の発話がインフォーマントに聞こえなかったことによる、繰り返しを求める発話のことを指す。(3) の下線部がそれに当てはまる。

(3) A：　なんか、おすすめのところとかはありますか↑　この辺
ABF：　うん↑
A：　おすすめのところ
ABF：　なに↑
A：　お勧めしたいところとかありますか↑
ABF：　さー、そんなところは＊＜どうじゃろか＞

「フィラー」はいいよどみをさし、(4) に現れるような「あのー」「そのー」などを指していう。

(4) A：　今まで旅行したところで一番気に入ったところとかございませんか↑
AIM：　んー僕ー、僕はね、あの こうー、いろいろよそ行ってないのよ あの
A：　あそうですか

4.　結果と考察

今回分析した談話において、先行研究でいわれているような FT に近い例はあまりみられなかった。また、逆接の接続助詞以外で方言形と標準語形の切換えもみられず、発話量にも FT といえそうな違いはなかった。4.1 節では今回の調査にみられた数少ない FT の例について述べる。次に 4.2 節では 3.3 節であげた高木（2002）を参考にした項目について分析し、方言形と標準語形、丁寧体と非丁寧体の切換えがあるかをみていく。最後に 4.3 節では対 A・B・C 間でのインフォーマントの発話量の違いについてみていく。

4.1.　典型的 FT

本調査では、スクータリデス（1981）とロング（1992）が述べているような FT は非常に少なく、3 例しか現れなかった。そしてその内 2 例は AIM の対 B 談話における冒頭部分で現れた。まず次の（5）と（6）を比べてもらいたい。

(5) B：　お仕事ー、［の方］
AIM：　［お］仕事はね、僕はー／少し間／野菜つくったりね
B：　あ、そうですか
AIM：　うん、野菜作ったりー、いんげん豆つくったり

(6) C：　えーと、まず、AIM さんは普段どういうお仕事をされて（＋ますか）
AIM：　僕は、あのー　、園芸、野菜つくったり、いんげん豆つくったりね
C：　あーいんげん豆
AIM：　菜花つくったり、です

（5）では、AIM の発話にポーズがあるので、適切な言い方を考えているのではないかと思われる。また、(6) の対 C 談話でも同じ言い方（「野菜つくったり」）を用いているが、下線が示しているように、対 B 談話では 2 回繰り返して言っている。したがって、FT のような例だといえる。

また、AIM の対 B 談話で現れたもう 1 つの FT の例は次の（7）である。

（7）B：　お名前の方をきい…

AIM：お名前はね

B：　うん

AIM：僕　○　○　○（AIM の姓）

B：　はい

AIM：ま…、○○○○（AIM の名）

上の例では、AIM が非常にゆっくり自分の名前を言っている。これは対 B 談話のみに現れた例であり、おそらくこのデータでは一番明確に FT であるといえる例と思われる。ただし、対 C 談話では同じところを録音しておらず、対 A 談話では AIM が自分の名前を言わなかったため、比較はできない。

しかしながら、ABF の対 A 談話における同じ冒頭部分でも、FT のような 1 例がみられた。以下の（8）から分かるように、ABF が自分の名前を強調して言っていたので、これも FT である可能性がある。

（8）A：　あ、ありがとうございます。えーとー、○○○さんですね↑（ABF の名）

ABF：はい、○○○（強調して）（ABF の名）

4.2.　談話に現れた言語形式の切換え

本節では、高木（2002）にならって、各談話に現れた方言形と標準語形や丁寧体と非丁寧体の切換えを分析した。

4.2.1.　接続助詞

西土佐の方言には、高木（2002）で扱われた宿毛市の方言と同様に、逆接の接続助詞の「ケンド」と、理由・原因の接続助詞の「ケン」があり、それぞれ標準語形の「ケド」「ガ」そして「カラ」「ノデ（ンデ）」と置き換えられる。本調査に現れたものを全て数え、その結果を次の表 3 と表 4 に示す。

表 3 逆接の接続助詞

	ABF			ACF			AIM		
	A	B	C	A	B	C	A	B	C
ケンド	5	3	8	-	1	1	2	3	12
ケド	11	1	4	16	19	20	21	8	3
ガ[5]	2	1	3	6	-	2	2	-	3

5）ただし、「嫌いガ」のように、逆接のガなのか、準体助詞のガなのかは判断し難い例が多いため、ガの数は参考程度に留める。

表 4 原因・理由の接続助詞

	ABF			ACF			AIM		
	A	B	C	A	B	C	A	B	C
ケン	13	15	36	22	11	20	28	11	39
カラ	1	1	-	1	3	4	3	-	2
ノデ	-	-	-	-	1	-	-	-	-

まず、表 3 から分かるように、逆接の接続助詞に関して、ABF と ACF の全ての談話で大きなちがいは現れなかった。ACF は 3 人に対して主にケドを用いており、ABF の談話にはケンドもケドも比較的少なかったが、2 つの使用数には大したちがいはないと思われる。しかし、AIM は対 A・B の談話では主に標準語形のケドが用いられ、方言形のケンドはそれぞれ 2 例と 3 例にとどまった一方、対 C 談話でケンドの方を多く用いた。

しかし、その結果を上の表 4 のケンの結果と比べると、FT ではないようにみえる。つまり、AIM は明確に対 A・B・C 間に対して主に方言形のケンをより多く用いており、方言形を避けようとしているのではなく、対 C 談話では偶然ケンドが多かっただけであるともいえる。また、ABF と ACF の談話では AIM と同様にケンの使用の方が明らかに多かった。以上の結果から、本調査のインフォーマントは、対話者が日本人であるか外国人であるかによって、接続助詞を方言形から標準語形に切換えているとは断言できない。しかしながら、原因・理由の接続助詞は切換えず、逆接の接続助詞は切換える、といった形式によって切換える可能性もある。さらに、初対面の人物に対してもケンがカラより多く用られたことは高木（2002）の結果と異なっているが、この違いは地域差や個人差などによる可能性がある。

なお、高木（2002）の原因・理由の接続助詞の結果と同様に、はっきりとした切換えが行われているわけではないといえるのが以下の（9）と（10）である。これらは調査者のあいづちをはさんだ一連の発話で方言形と標準語形の両方の形式が使用されており、方言形を使用するか標準語形を使用するかが統一されているわけではないことが窺える。ただし、カラとケンの場合には、使用数が少ないため明確にどちらとはいえない。

（9）AIM：　昔ー、貧乏しよった ケン ね。
　　A：　あー
　　AIM：　んで、兄弟がだいぶおった カラ ね

（10）AIM：　もう来てもかまん歳や ケンド ね。入りにきたけ
　　C：　んー
　　AIM：　70 から歳関係ないいう ケド ここは

また、ノデの例が ACF の対 B 談話に 1 例現れたが、はっきり切換えているわけではないと思われる。その例が以下の（11）である。

（11）ACF：　んそんで、あの、学校、免許とりにみんな行ったけど、学校行く時分にはちょうど子供が、高校へ行ってた ノデ ようお金の都合がつかなくて
　　B：　んー

ACF： よう行かなかったがです。ほんやけんど、なんとかして
B： ん
ACF： あの人並みな、こともようせんでも、バイクの免許だったら、自分で
B： うん
ACF： 頑張ったら、とりに行ったら、とれます ケン ね

（9）にみられたカラとケンの使用のように、（11）のノデのすぐ後にケンが現れていることから、単に連続的な切換えなのではないかと考えられる。さらに、4.2.3 節と 4.2.4 節に詳述するが、ACF が他の話者と比べて丁寧体の使用が多く、このノデの使用はそのことと関連していると思われる。

4.2.2. 準体助詞

談話それぞれに現れた準体助詞ガ・ノ・ンを数えた結果を表 5 に示す。なお表 5 の括弧内は準体助詞ガ・ノ・ン全体の使用数に対するそれぞれの形式の使用の割合を示す。

表 5 準体助詞の使用数

		ガ		ン		ノ		計(100%)
ABF	A	8	(30)	17	(63)	2	(7)	27
	B	8	(47)	5	(29)	4	(24)	17
	C	11	(52)	9	(43)	1	(5)	21
ACF	A	18	(58)	1	(3)	12	(39)	31
	B	10	(31)	4	(13)	18	(56)	32
	C	20	(54)	3	(8)	14	(39)	18
AIM	A	10	(56)	4	(22)	4	(22)	18
	B	4	(28)	4	(28)	6	(43)	14
	C	21	(68)	7	(23)	3	(10)	31

仮に対 C 談話に比べ対 A・B 談話でガ・ンより標準語形であるノが積極的に使われていればそれは FT の特徴といえそうだが、対 A・B 談話のノの総数をみると対 C 談話と比べ極端に多い訳ではない。ちなみに AIM はガの使用が対 B 談話で対 A・C 談話と比べて少ないようにみえるが、以下の 4.3 節の図 1 に示すように、AIM は対 B 談話で全体の実質的発話数が対 A・C 談話と比べて少ない。そのためガの数が全体の実質的発話の少なさと単に比例して少なくなったと考えられる。以上のことから、この項目でもはっきり FT といえる結果は現れなかった。また、次の ACF の対 B 談話からの（12）に、ガ及びノ両方の使用がみられる。

（12）ACF： 姉ちゃんの方は、2… 28 ですけんね
B： ん
ACF： ＊＜ほんで＞、去年結婚したガです

B：　　あ、そうですか

ACF：うん。それも長女ですよ。2 人しかおらんノです

このような例は全ての談話にみられ、共起する形式が丁寧体であるか否かなどとは関係なく、準体助詞の場合も意識的に切換えているわけではないと思われる。

しかし、準体助詞ガ・ノ・ンそれぞれが使われた発話をみていくと、ACF・AIM のノの使用に FT の可能性である特徴的な違いがみられた。それは ACF・AIM の対 A・B 談話でみられた。対 B 談話にみられた次の（13）はそのうちの 1 つで、ノが疑問文の文末に付加されている。

（13）ACF：泊まっておいでる所でするノ↑

ノが文末に付加された疑問文は対 C 談話には 1 例もみられず、対 C 談話では平叙文の文末のイントネーションを上げることで問いかけが行われていた。これは疑問文であることを分かりやすくしている FT の可能性があるが、全体数が少ない（ACF : 対 B＝4 回／AIM : 対 A＝1 回、対 B＝3 回）上に疑問文全体の数の中での割合も高いわけではないので、FT であると断言はできない。

4.2.3.　コピュラの切換え

次に、デス・φ・φ＋文末詞・ダ・ヤ・ジャの数をそれぞれ数えたものを表 6 に示す。ここでは平叙文に現れたコピュラや、デスの中でも名詞述語や形容動詞述語について数えており、「暑いデス」のように形容詞に接続したものは対象としない[6]。なおφはデス・ダ・ヤ・ジャなどが後接しうる箇所（名詞述語や形容動詞述語）のうち、いずれの形式も使用されていない箇所を指す。

表 6 名詞・形容動詞と共に現れたデス・φ・ダ・ヤ・ジャ

	ABF			ACF			AIM		
	A	B	C	A	B	C	A	B	C
デス	11	4	6	10	23	45	2	3	-[7]
φ	13	9	11	7	3	8	8	5	9
φ＋文末詞	4	2	2	3	3	1	5	12	5
ダ	-	1	2	-	-	1	-	1	2
ヤ	-	2	4	-	2	1	3	10	10
ジャ	1	1	3	1	-	-	-	1	-

デスと、φ・φ＋文末詞・ダ・ジャ・ヤの数の比率を対 A・B・C 間で比較することで丁寧体と非丁寧体の切換えが行われているかを観察したが、対 A・B・C 間で切換えが行われているといえる差はみられなかった。このコピュラの使用のゆれは次の ABF の対 C

6）分析の際に形容詞に接続するものも数えたが、対 A・B・C 間に違いはみられなかった。

7）平叙文の名詞・形容動詞に接続するデスは 0 例であったが疑問文に数例デスの使用例がみられたので AIM が C に対して終始一貫して非デス形で話していたわけではない。

談話からの（14）にみられる。

（14）ABF： 局長さんヤけんね

C： んー

ABF： ほんで、うちの息子が、ゆ…、局行きよったけんね

C： あー

ABF： ほんでその人の、なん ジャ けん

また、ジャ・ヤの比率を対 A・B・C 間で比べてみても、どの話者に関しても対 A・B・C 間で切換えが行われているとは言い難い。ABF、ACF、AIM 全員が共通してコピュラの「ダ」を対 A 談話で用いなかったが、切換えが行われていると断言するにはダの使用例が 1～2 例と少ない。ただし、以上の表 6 にはダが非常に少ないものの、体言に後接しているもののみを取りあげている。数は少ないが、体言に後接していないものにもダが現れ、例えば、以下の（15）に ACF が対 B 談話でダケドを用いた。

（15）B： そうですか

ACF：ん。ダケド、今日は休みですけんね。今と今日とは

B： あー

しかしながら、体言に後接していないものをカウントに入れた場合も、多くてもそれぞれ 1 例のみになるため、結果は変わらない。

4.2.4. マス形と非マス形の切換え

マス形と非マス形の数を比較することで、前節のデスと併せて丁寧体と非丁寧体の切換えについてみる。談話中に現れたマス形と非マス形（φ）の数は以下表 7 の通りである。

表 7 動詞のマス・φ

	マス			φ		
	A	B	C	A	B	C
ABF	23	8	6	28	42	51
ACF	37	30	48	7	28	18
AIM	-	1	4	33	51	90

マス形の使用数と非マス形の使用数を比べると、ACF は A・B・C 誰に対してもマス形を多く用いており、AIM は非マス形をよく用いている。対 A・B・C 間で違いが現れたのは ABF の談話においてであり、対 B・C 談話ではマス形より何もつけない非マス形が優勢であるが、対 A 談話ではマス形をよく用いている。これは ABF の調査において対 A 談話が初めに行われたことが要因となっている可能性がある。つまり、対 A 談話が ABF にとって初めての調査であり、ABF が調査の場に慣れておらず、そのため丁寧体をより用いた可能性がある。そして、それが要因であれば時間の経過に伴ってマス形優勢から非マス形優勢への変化があるものと思われる。時間の経過によるマス形使用数の推移をみるために、ABF の対 A 談話を三分割し、それぞれのマス形と非マス形の使用数を調べた。結果を表 8

に示す。

表 8 ABF の対 A 談話で現れたマス使用数の推移（マス：23 回　φ：28 回）

時間	前部(00：27～8：27)	中部(8：28～15：28)	後部(16：29～24：47)
使用数	7（5）	3（11）	13（12）

※括弧の中はφの数

表 8 をみるとマス形の使用数は時間の経過と共に増えているため、対 A 談話の順番が最初だったことが、後に収録した対 B・C 談話に比べてマス形が多くなった原因とは考えにくい。したがって、マス形の使用数の多さの原因として考えられるのは、ABF の対 A 談話が対 B・C 談話に比べて収録時間が長く（3.2 節表 2 参照）、時間の長さに比例して発話量が多くなったこと（4.3 節表 9 参照）である。

また、それぞれの談話に現れたマス形・非マス形の切換えに関して、主節末、従属節末など、出現環境による違いはなさそうである。以下の（16）にみられる「オル」と「オリマス」では、同じ主節末であっても非マス形とマス形の両方が使用されている。

（16）AIM：お猿さんね、んと、この辺に オル よ
B：　そうですか
AIM：うん オル 。山の方に
B：　猪とかも↑
AIM：猪も、鹿もね
B：　あそうですか
AIM：オリマス
B：　熊も↑
AIM：熊は、これは四国。熊はおらんでしょ

4.3.　発話量

3.3.3 節の分類基準をもとに数えた、談話における「実質的発話」「あいづち」「聞き直し」「フィラー」の数を表 9 に示す。表 9 から分かるように、話者それぞれの発話数の総数が異なっているので、図 1 に話者ごとの発話タイプを割合で示す。図 1 をみると、ABF・ACF では対 A・B・C 間で注目するような違いはないようにみえる。しかしながら、少し目立ったところがある。1 つは AIM の対 B 談話で、「実質的発話」と「あいづち」の数がほぼ同じになっていることであるが、この理由に関して、現段階では明確な答えが出せない[8)]。もう 1 つは、ABF の対 A 談話でフィラーの使用割合が高いという点である。

8）自ら話を進めるのではなく、外国人である調査者の話を聞こうとした可能性があると思われる。

表 9 各会話におけるインフォーマントの発話タイプの実数

		実質的発話	あいづち	聞き直し	フィラー	不明※	計
ABF	A	235	112	9	120	5	481
	B	135	65	8	44	6	258
	C	181	57	13	29	10	290
ACF	A	192	56	1	48	1	298
	B	173	44	3	21	4	245
	C	179	49	-	38	5	271
AIM	A	242	86	2	60	3	393
	B	157	156	3	50	2	368
	C	305	100	8	68	15	496

※不明：一部もしくは大分が聞き取り不可能で、述語・あいづち・聞き直し・フィラーのいずれにも分類不可能であったもの

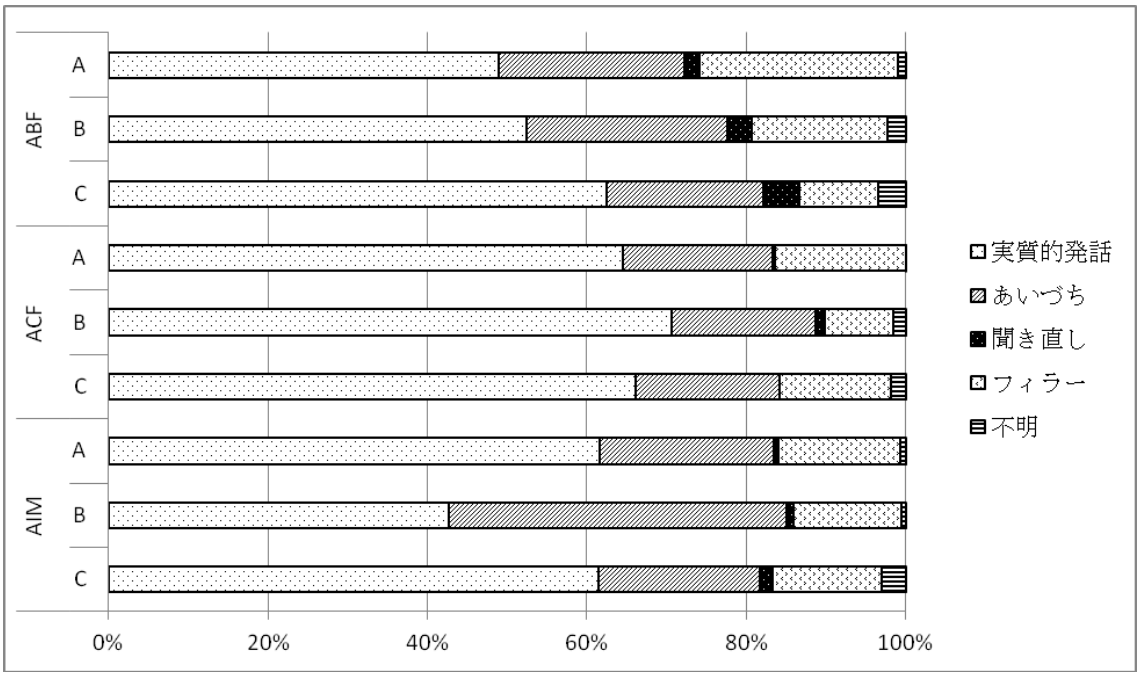

図 1 各会話におけるインフォーマントの発話タイプの割合

ABF は対 A 談話で対 B・C 談話に比べはるかに多い計 120 回のフィラーを使用したが、表 10 に示すように談話データを 8 分ずつ分けて前部、中部、後部に分類すると、時間が経つにつれフィラーの使用が増えていることが分かった。特に、昔の生活に関する話をする時、ABF の苦労した経験を語るところでフィラーが多く用いられている。このことから、FT としてのフィラーというよりは、話を語る過程で自然的に出てきた言いよどみの方に近いと思われる。

表 10 対 A 談話で現れた ABF のフィラー使用

時間	前部(00：27～8：27)	中部(8：28～16：28)	後部(16：29～24：47)
フィラー使用数（回）	19	37	64
実質的発話数	71	88	76
話題	▪ 自己紹介 ▪ 地元の商店 ▪ 夏の観光客 ▪ 近くの観光地 ▪ お勧めの食べ物	▪ 昔の生活について	▪ 昔の生活話の続き ▪ 孫について ▪ いちいの郷

また、ABF の調査では対 A 談話が一番最初に行われたため、慣れていないインタビュー状況への緊張感が対 B・C 談話に比べフィラーの数が多くなった原因の 1 つになりうる。（17）のように ABF 自身の苦労した昔の経験を語るときなどでは、1 つの発話の中でフィラーが多く用いられている。つまり、ABF のフィラーは話を語るため必然的に用いられたフィラーであり、FT として用いられたフィラーではないと考えられる。

（17）A：　はい

ABF：みんな アノー、おと…お父さんお母さんもおったり、いろいろ来てね。アノー、＃にあのう暮らし、できちょりますけんね。

さらに、2 番目、3 番目で ABF さんをインタビューした B と C の質問内容がほとんど A と重なっていたことから、同じ内容を 3 回繰り返すことになったため、後ろに行けば行くほど話し慣れてフィラーやためらいなどの表現が少なくなったのではないかと思われる。

5.　まとめ

本稿では、高知県四万十市西土佐におけるスタイル切換えについて、FT の観点からの調査結果を基に報告を行った。まず、先行研究の分析から FT の特徴を把握し、①当地域の方言話者はどのように外国人に向かって話すか、②外国人対話者の外見によって用いることばを変えるかに注目し、考察を行った。その結果、西土佐のスタイル切換えについて以下のことが明らかとなった。

（a）自己紹介の部分以外では典型的な FT の特徴は現れなかった。（4.1 節）

（b）初対面の調査者に対しても方言形を使うといった点で先行研究との違いはみられたが、方言形と標準語形についても、丁寧体と非丁寧体についても対 A・B・C 間での切換えは、逆接の接続助詞以外ではほとんどみられなかった。（4.2 節）

（c）対 A・B・C 間で発話量の違いはあまりみられなかった。（4.3 節）

以上のように、言語形式に関しても、言語行動に関しても、西土佐においては自己紹介以外の部分で FT と思われる特徴はあまりみられなかった。

このように FT が現れなかったことに関して、インフォーマントに外国人との接触経験がほとんどなかったことや、地点の都市化の度合い、もしくは調査者の日本語能力の高さ

などが影響している可能性がある。この点については、同地点における外国人との接触経験の多い別世代への調査や、都市化の度合いの異なる別地点での調査、日本語能力の低い外国人に対する言語行動の調査などを行うことによって、より深く考察できると思われるが今後の課題としたい。

【談話例文の文字化表記】

...	言いさし	@	笑い
↑	上昇イントネーション	○	個人情報
＃	聞き取り不明	［..］	重なっている発話
＊＜..＞	聞き取った発話に確信がない	(..)	調査員のコメント

【参考文献】

オストハイダ・テーヤ（1999）「対外国人行動と言語外的条件の相互関係」『大阪大学 日本学報』18，pp.89-104，大阪大学文学部日本学研究室.

スクータリデス・アリーナ（1981）「日本語におけるフォリナー・トーク」『日本語教育』45，pp.53-60.

高木千恵（2002）「高知県幡多方言話者のスタイル切換え」『阪大社会言語学研究ノート』4，pp.55-72.

ロング・ダニエル（1992）「対外国人言語行動の実態」『日本語研究センター報告』1，pp.57-69，大阪樟蔭女子大学日本語研究センター.

CARTER　Barbara（大阪大学大学院生）
blcarter@ualberta.ca
しらさか　ちさと（大阪大学大学院生）
cslanguage@gmail.com
はん　あるん（大阪大学大学院生）
hanarumig@gmail.com